

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1988年

ポーランド月報

1/2月号
(通巻70/71号)
500円

アンジェイ・ワイダ インタビュー
戦いすんだ戦場 J・クーロン
ゴルバチョフ改革：3つのシナリオ



日本とポーランドの真の交流を……………3
 インタビュー：アンジェイ・ワイダ

戦いすんだ戦場——現情勢と「連帯」の戦略……………6
 ヤツェク・クーロン

ポーランドから見たゴルバチョフ改革：
 3つのシナリオ ヤン・ノヴァク……………14

地下新聞の信頼性 ミハウ・コウォジェイ……………20
 最近地下出版事情 ヤン・クリンチ……………26

ポーランド日誌 1987年10月31日～11月30日……………30

❖❖ ふたたびカンパのお願い ❖❖

ポーランド資料センターの財政基盤再建の試みは結局実りませんでした。昨年に引き続き、今年もまた財政危機の中の出発となります。

昨年度は、会員・読者、そして労働組合の厚いご協力により、緊急に100万円余のカンパを頂き、急場をしのぐことができました。これを足がかりに、この1年、新たな財政基盤確立のためにそれなりの努力を重ねてきたのですが、力及ばずでした。情勢の厳しさとわれわれの力不足を痛感します。

ポーランド情勢は大きく様変わりしようとしています。満を持してのヤルゼルスキ將軍の国民投票の賭けがものみごとに失敗しました。「連帯」は公然活動中心へと大きく路線転換しました。ソ連ではゴルバチョフ改革が進行し、ポーランドその他東欧諸国にもさまざまな影響を及ぼしはじめています——ポーランド資料センターが果たすべき役割はまだまだ多くあると確信します。その維持に全力をあげる所存です。

新たな財政基盤を確立することが緊急に必要です。現在、ブリュッセルの「連帯」在外調整局とも連絡をとりつつ、そのための準備をすすめています。具体策が固まりしだい、会員・読者、そして労働組合の方々にはあらためてご援助、ご協力をお願いすることになるかと思えます。

新たな財政基盤が確立されるまでの間、若手のつなぎ資金が必要です。約50万円を目標に緊急にカンパをお願いする次第です。

2年続きのことでまことに恐縮のかぎりですが、よろしくお願いします。

1987年12月15日 ポーランド資料センター

日本とポーランドの真の交流を

インタビュー：アンジェイ・ワイダ

Interview with Mr. Andrzej Wajda

by Yoshiho Umeda, 15 Nov. 1987, Tokyo

【編集部注】 「灰とダイヤモンド」、「大理石の男」、それに現在東京で上映中の「愛の記録」など数々の名作で日本にも熱心なファンの多いポーランドの映画監督アンジェイ・ワイダ氏が、この11月、京都賞受賞のため来日された。氏はポーランド資料センターの設立以来の幹事の1人でもある。以下は、超過密スケジュールの中、特に本誌読者のために時間を頂いてお願いしたインタビューの要旨である。インタビューは11月15日、東京のホテルで行われた。聞き手は、ポーランド資料センター幹事、梅田芳穂氏。

アンジェイさん、ポーランド資料センターより、その幹事であられるあなたに対して、まず、京都賞受賞のお祝いを申し上げます。さて、今回、インタビューや講演などでいろいろ発言しておられますが、若干私が不安に感じておりますのは、あなたは生涯、特にこの数年間、絶え間なく真実の証しを、勇気をもって訴えていらっしゃいました。しかし、今回の訪日に関して申しますと、少なくとも日本語で読んだり、聴いたりする限り、この素晴らしい姿勢が隠されてしまっている気が致します。何か理由がおりないのでしょうか。

理由は一切ありません。ただ、私の今回の訪日の目的は京都賞受賞にあります。ご存知のように、私はこの賞金の全額を、クラブに建設予定の日本美術収容のための美術館設立の基金の一部に当てることにしました。これは、通常美術館というよりも、日本の芸術一般、また日本の技術などが幅広く紹介される場になるかも知れない。このようなことから、私が日本であえて政治的発言をするのと、この私の訪日目的を正しく理解して頂く妨げとなると考えました。美術館建設のために援助をお願いする一方で、私が生活している国全体が完全に破綻し、廃虚と化していることを説明しても、矛盾するだけだと考えたからです。

それに、ポーランドの情勢は非常に複雑です。遠くから見ているとその複雑さを感じ取ることはできないかも知れませんが、本当に複雑なのです。



アンジェイ・ワイダ監督

ポーランドの情勢は、数多くの要素によって動かされていますが、それによって作り出される現実もほんの一部しか表面に現われません。われわれが観察しているのは、海面から顔を出した氷山の一角にすぎないのです。例えば、今度計画されている各種の値上げに対し、大衆がどのような反応を示すか、国の経済的破綻にどのように対応するのか、まったく不明なわけです。私はそれらの事柄に関し一切調査していません。政府側も、反体制側も、はっきり言って、同じデータをもとにして調査を行いながら、相方とも特定の傾向的意図を持ち、互いに自分が正しいと主張し、非難しあ

っております。このことについて私が明確な意見を持つためには、自ら調査機関を持たなければなりません。今のところ、私はその準備も、また手段も持ってはおりません。ですから、私は、知りようのない事柄について憶測を巡らすという安易な態度を捨て、ただポーランドを、より日本に近づけるという考え（訳注：ポーランドを第2の日本にしたい、というワレサ委員長発言をさすと考えられる）に賛同したのです。

ポーランドでは日本への関心がきわめて高い。なぜなら、ある意味で日本はわれわれが望んでいる理想郷の域に達していると思われるからです。つまり、日本は現在、最も近代化的な国であると同時に、伝統に深く根付いた国であります。これこそ、われわれが望んでいるポーランドの未来像なのです。ポーランドは、日本全体に強い関心を寄せていますが、その個々の要素についても同じことが言えます。数多くの若者が仏教哲学に深く傾倒した結果、仏教を宗教として自分のものにしたことも、もはや秘密ではありません。日本式の精神的、肉体的鍛錬を行っている若者は実に大勢おります。しかし、何よりも、最も関心が深いのは、日本の最新技術情報についてであります。私は、この若者たちの好奇心が健全に発展することを望んでいますし、それを満たすための場所を与えなければならぬと考えています。そのためには、将来実現されると思われるクラクフの美術館という場が、大変大きな役割を果たすものと希望を託しております。

「道徳的不安の映画」

ありがとうございました。次の質問ですが、監督、80年代初頭、あるいはそれ以前からその傾向はあったのかも知れませんが、ポーランドでは、いわゆる「道徳的不安の映画」と呼ばれている流れが興りました。しかしこの数年、この流れを汲む映画が見られなくなったように思います。どうなつたのでしょうか。

そう。81年12月13日の戒厳令の夜に現われた戦車と共に、その流れは堰止められました。しかし、1981年に撮影が開始されたこのグループの10本ほ

どの映画は、映画人協会などの後押しもあって、一応最後まで完成はしております。もちろん、非常に政治的であるという理由で政府当局からの厳しい非難を受け、そのままお蔵入りとなってしまいました。でも、今年に入ってからですが、例えばグダンスクの映画祭や他の映画祭などで、徐々にこれらの映画がスクリーンに登場するようになりました。これは楽観できる傾向と思われまふ。それらの映画のうち、例えば「忠実な川」やアグニェシカ・ホランドの「独りぼっちの女」はテレビで放映されました。「偉大なる走行」はモスクワの映画祭に出品されました。これらはすべて私のXグループの監督たちの作品です。ただ一つ、未だに口目を見ないのはプガイスキの「迅問」で、これは政府当局が監督の米国亡命を理由に公開していません。いえ、完全に抹消されてしまったと言ってよいかも知れません。しかし、全体的には良い環境になりつつあります。

しかし、同時に言わなければならないことは、この数年間、社会問題および道徳的不安の問題は、完全にスクリーン上から消え去ってしまったということです。この時期に製作された映画のほとんどが、国内における興業成績を上げるためのみに製作されたものです。

ポーランド映画の興業的成果のことに触れますと、これまた問題が複雑になります。ポーランド国内であまり人気の出なかった映画でも、西側でほどほどの成果を収めることが出来れば、それだけで映画の製作費を稼ぎ出すことができ、映画は赤字ではなくなります。例えば、私の「愛の記録」はポーランド国内でははいやいや配給されていたのですが、一旦、海外に高額で売り出され、大きな成功を収めると、製作費の数倍の利益が上がったわけです。ポーランドの映画の興業については、国内の観客の嗜好だけを考慮するのではなく、より、外国で売れる映画を製作する必要があるのです。

さて、アンジェイさん、あなたは「大理石の男」と「鉄の男」の監督をなさいました。私が受けた感じなのですが、この2本の映画は、構造的に3部作の1部、2部であるように思われて仕方ない

のです。もちろん、今、監督にこの質問をすること自体、監督を当惑させるだけかも知れません。それに手の内を説明して頂くのは時機尚早かも知れません。しかし、もし第3部ができるのであれば、どのような条件が整わなければならないのか、また、その内容はどのようなものになるのか、差し支えないところでお話し頂けないでしょうか。

「鉄の男」の続編？

はっきり申し上げて、第3部のことは考えていませんでした。いや、意識的に頭から追い払おうとしていたのかも知れません。「鉄の男」は非常に楽観的な要素で終わっています。だから、その続編でも、戒厳令下という非常に暗い現実を対象にすることは考えられないわけです。もし、第3部が作られるとすれば、それは第2部の時代よりはより良い時代、より素晴らしい時代の中でなければなりません。ですから、私はこの考えを絶えず避けておりました。

でも数日前、ひょっとしたら、第3部の製作は可能ではないかと考えるようになりました。それは、日本のある新聞記者が私に「鉄の男」のヒロインは今どうしていますか、と聞いた時です。これは確かに良い質問でした。私はこの質問に対して考えるようになりました。彼女は怎么样了のだろう……。おそらく、私と同じだったでしょう。西側へ出たかも知れない。そして西側で映画を製作したかも知れない。しかし彼女はその映画を製作したところで、彼女自身の問題は1つも解決していないことに気付く。そして、ポーランドに帰って来る。ポーランドでは検閲のために映画製作ができない。そして、来たるべき事態を待っている。……その時ひらめいたことは、第3部は彼女の物語……数年後の……でなければならないかも知れない、ということでした。しかし、「鉄の男」はその後どうなったのか。マチュック・ビルグートの運命は……となると、まだお答えすることはできません(笑)。

もう、相当長い時間を拝借しております。最後に、これは質問ではありませんが、ポーランド資料セ



1981年5月、来日時のアナウンサー

ンターの幹事として、「ポーランド月報」の読者に何かメッセージをお願いできないでしょうか。「ポーランド月報」の読者は、その数は非常に限られておりますが、その代わり、ポーランドに深い関心を寄せ、ポーランドの事態を非常に心配して下さる方ばかりですから。

今回の訪日は3度目になりますが、また日本に来たということ非常に幸福でした。今回はあまり日本を見ることができなかったかも知れません。とても忙しかったですからね。しかし、日本の現実に影響を持つことができるいくつかの場所を訪問し、人々と話し合うことができました。そして、私が提案した日本美術館設立の基金についても確かな感触を得ることができました。将来、偽りの「正常化」ではなく、真に正常な情勢にわが国が戻った時、クラクフのセンターと日本の皆様方が自由に意見交換し、互いに協力し合っていく時代になれば素晴らしいと考えます。

ありがとうございました。

戦いすんだ戦場——現情勢と「連帯」の戦略

ヤツェク・クーロン

Landscape After the Battle, Jacek Kuroń ©1987

Uncensored Poland News Bulletin, No.22/87,13 Nov. 1987

【編集部注】 前号で同じタイトルによりヤツェク・クーロンのインタビューを紹介したが、以下はこのインタビューの前提になった同じ著者による論文の全文である。前号所収の「連帯」暫定評議会の議論とあわせて検討されたい。こうした議論を経て「連帯」がその活動の重点を公然面に決定的に移したことは前号で指摘のとおりである。なお本論文には特に著作権が設定されている。転載・複写は遠慮願いたい。本誌での訳出・掲載にあたっては『無検閲ポーランド・ニュース』の承認を得た。 [訳：水谷 駿]

「連帯」関係者の多く、そしてその他の自立的運動を担う人々の多くが、出口なしの状況に行きついてしまったという感じを深めている。「出口なし」という言葉でさえ十分強力ではないかもしれない。それは、われわれが成功を取ることができなかった1982～83年の状況をよく説明する言葉であった。今日にいたるもわれわれは成功を取っていない。そればかりか、最も楽観的な人々でさえ、「黙せる大衆」に対する「連帯」活動の影響がいちじるしく弱まっていることを認めている。

われわれは成功を取っていない。〔1986年9月の〕政治囚の釈放後、明らかに政府当局がふたたび国民の圧力に敏感になり始めたにもかかわらず、そうなのである。たしかに、圧力が効果をあげたケースは多く存在する。たとえば、「自由と平和」がいくつかの勝利を獲得し、自主管理評議会の統一行動が反労働者法の阻止に成功している。だが、このリストはなぜかくも短いのか？

おそらく今日、全国規模で賃上げを実現する効果的な圧力を組織するのは不可能であろう。経済的破局という条件の下では、全労働者の賃上げのための共同闘争は不可能である。それは物価上昇をもたらす。

ポーランド社会の最大の自立的勢力である「連帯」は、いわゆる戦争〔戒厳令〕の最初の数カ月間に現在の組織構造をもつにいたった。今日それは、根本的に新しい状況になかなか適応できない

でいる。この適応不全が運動内部の現在の危機の主たる原因である。運動の構造それ自体が現在、その主たる障害となっている。

社会に対する譲歩

反革命——1981年12月13日〔戒厳令布告の日〕に始まったのはまさに反革命であった——は、社会状況を革命以前のそれに戻すことは絶対にできない。それはつねに、革命から取り入れることが可能なものすべてを何とかして取り入れようとする試み、体制をその本質は変えることなく建て直すような試みなのである。したがって、1980年8月以前、あるいは1981年12月以前の状況への復帰はないと言ったヤルゼルスキは正しかったのである。

ここでヤルゼルスキ将軍と彼のチームの意図を分析するつもりはない。結論は、彼らの行為に基いてのみ導き出される。彼らは、疑いもなく、その前任者の誰よりも、社会を操作する術において比較にならないほどたけている。12月13日以降彼らは、たとえ祖国の全体を血の海に沈める結果となっても、いかなる圧力にも絶対に屈するつもりのないことを、社会に確信させた。同時に彼らは明らかに、権力の座にとどまろうとするならば、ポーランド国民を徹底的に追いつめてはならないことも理解したのである。この間ずっと、彼らは

社会に対してある程度の譲歩を続けている。しかし彼らは、この譲歩が常に「ご主人」の何か特別の恩恵であって、決して国民の怒りの結果ではないという外観をとるように腐心してきた。

「連帯」は、1980年8月以降のわが国の状況の形成にあたり決定的な役割を果たした。そして12月13日以降も——少なくとも同程度の重要性を有することであるが——自らが解体されることをついに許さなかった。われわれは彼らの情報独占を打ち破った。われわれはポーランドにおける制度的多元制を実現し、その維持に成功した。それは公的国家機構の分野で実を結び、政府当局を無害化している。

事実上の多元制

あの16カ月間〔「連帯」の登場から戒厳令までの〕に声高く語られた真実は、社会のほぼ全体の耳に到達した。地下でわれわれは、かつてない規模の新聞・出版の自由を維持している。そこで政府はある選択をせまられたのである。無意味なプロパガンダを続けるか、それともマスメディアに真の情報を認めるか。後者が選ばれた。もちろん今なお、最も広い意味での社会的、経済的現実に関して、多くのうそと偽り、情報のギャップが存在する。しかし明らかに真実が広がっている。文字の読める人間なら誰でも、与えられた情報に基いて自らの判断を形成できる。あるいは彼らは、自立的な情報を根絶して、昔のやり方に戻りたいと思ったかもしれない。しかしそれはやらなかった。その代りに、新しいジャーナリストや編集者で構成される新しいメカニズムを機能させはじめた。今やその逆転は大混乱なしには不可能である。

8月後の自由の中で、国民の道徳的、政治的統一なる神話が消滅した。はじめて明確に、さまざまな社会的集団の利害の多様性が明らかになった。さまざまな利害はそれ自体の制度的表現を、その代表機関を持たねばならないという確信が全体に広がった。当局はこの原則を受け入れた。12月後、さまざまな諮問機関や新労組、協議会、委員会などの任命が始まった時、それらはすべて人形劇のように見えた。ところが、「連帯」の経験と自立



POLSKA 80 Zł

的な競争の存在が社会的圧力の雰囲気を作り出したのである。こうした雰囲気の下では、多様な利害を代表するという宣言された建て前がフィクションの世界にとどまり続けることは不可能だった。公式の形式的機関がある程度実質的なものになった。

官製の新労組は、これに対してどのような見解を持つかが、旧労組〔1980年8月以前の〕よりもむしろ「連帯」に似てきている。消費者連盟や環境保護クラブは、本当に消費者の利益を守り、環境を保護しようとしている。現在正式の登録を求めている経済協会のような、下から生まれてくる社会的なイニシアチブは、未来に希望を与える。

公式世界観の崩壊

最近の体制の変化はすべて、あまり実体を伴わない言葉の上だけのものだとする見解が今も聞かれる。これは、共産主義支配の基礎となっているメカニズムの重大な誤解である。このメカニズムの最も重要な要素が分子化、すなわち社会的絆の切断である。これは公式世界観が全体を支配し

ではじめて可能になる。現実から避難した党公認ののっぺらぼうな世界観である。この世界観を支えるのが公式言語である。これが公的な事柄について伝える唯一の手段であるとき、それは人と人との間の、あらゆる自立的活動の間のすべてのコミュニケーションを不可能にしてしまう。

ポーランドでは、公式世界観は事実上存在しなくなっている。公的な事柄について知りたいと望むものは誰でもこれを知り、現実を反映した共通の言語でこれについて議論することができる。それだけではない。自立的な行動を組織することも可能である。ささやかな地方的な問題に関する行動なら公式に、その他すべてについては非公式に、しかもあまり大きな危険を伴うことなく。

体制がすべての悪の根源であり、これを全体として変えねばならない以上、小さな問題を取り上げるのは無意味だ——こうした見解が根強く存在する。たしかに、われわれの眼前で崩壊しつつある体制の特徴はその全体性にある。だがこれは、あらゆる変化がこの全体性に影響することを意味するのである。

黙せる大衆

現実に関する公式見解が崩壊したことの帰結のひとつが、今日では社会学的研究がポーランド社会に関してきわめて公正な知識を提供するようになっており、そこからきわめて明確な姿が浮かびあがっているという事実である。

わが国民の成人の10~20%が、ポーランドの政府当局と、従ってそこに現存する制度を無条件に支持している。約20%は現体制に対する明白な反対者と考えることができる。彼らの大部分は「連帯」の支持者であるが、必ずしもそのすべてが地下活動の支持者とは限らない。以上の両者は、自らの見解を表明することにためらいはもたず、さまざまな機会に聞こえるのは、まさに彼らの見解である。

残りは、その大部分が、平和と静穏、身の安全、そして秩序を重んじる。ここにおいてはおそらく、数年前の深い不安の記憶が、さらには日々の必要を充足する不断の努力に対する疲労の記憶が重要

な役割を果たしている。平穏と身の安全に対する期待が何らかの形で政府当局を受け入れさせる——それはいかなるものであれ、反対派活動に伴う危険よりは望ましいものである。ここから、公的秩序の混乱に導びきかねない行動、あるいは禁止されている行動を起こすことに対する消極性が生まれる。同じ理由から、人々の大多数は値上げよりも商店の空っぽの棚の方を不安に思い、さらには安い価格や商店の前の長い行列よりも市場への財貨供給の改善の方を高く評価する。

今日、ポーランド人の20%以上が貧困生活を送っており、家族を飢えから守ることにその全精力を注いでいる。彼らにとっては、公的な事柄はおよそ関心の外である。最低水準以下への転落をかわらうじて免かれた人々——彼らが最も多数である——もまた政治には関心を持たない。何とかなして手にした生活水準の維持が彼らに不断の努力を要求するからである。

以上すべてにもかかわらず、国民の圧倒的多数は政府当局をまったく信用していない。その善意の意図にも、経済を効果的に運営するその能力にもまったく信を置いていない。政府当局の能力を信用しないという点では、自らも支配階級の一部と考えている人々も同じである。彼らの多くは、自らの個人的条件の改善を政府当局が承認し、奨励するイニシアチブと結びつけて考えようとはしていない。同時に、人々はいかなる反対派活動の有効性をほとんど信じていない。こうした活動に対する反応は期待よりもむしろ不安であり、このことはポーランド独立のあらゆるプログラム、民主主義の拡大のあらゆる運動にあてはまる。

改良主義的対応

一方政府当局は、国民を屈服させるというその目的の実現にある程度成功した。しかし彼らは、不安と無関心は統治の基礎たりえないことを認識している。これは生活条件の根本的な改善によってのみ可能となるが、しかし全面的な幻滅感が改革と建設の作業への国民の参加を不可能にしている。他方政府当局は、国民の敵対を恐れて大胆な解決策はすべて採ることができない。



反対派知識人たち——左からマリウシュ・ヴィルク、イェジ・マルクシェフスキ、ヤツェク・ビェレジン、ヤツェク・クーロン、ヤン・リディンスキ

改革はノメンクラトゥラ層の大幅な削減を必要とするが、これこそは政府当局の唯一の社会的基盤なのである。ポーランドの支配層は連帯と特権の絆を有しているが、同時に彼らは社会的、政治的、生活の組織者でもある。このふたつの役割の間には明白な対立が存在する——このことが官僚個々人の心と精神を切り裂き、これは党＝国家機関内部の分岐となって外に現れる。自らノメンクラトゥラの役割に徹しようとする者は、彼らが恐れる社会を屈服させることによって権力の座を維持しようとする。自らを組織者としての役割でとらえようとする者は、改革や建設、生活水準の向上などを通じて自らの支配を強化しようとする。彼らは同盟者として社会を必要としており、それゆえに、局地的な抗議や行動、とくに経済の分野におけるそれによって作り出された社会的圧力に対して敏感である。社会的自立の限界は、計画的にこのレベルにとどめられなければならない。ところが、社会運動のダイナミズムの特徴のひとつは、誰にもその限界をあらかじめ決定できない、という事実のうちにある。

共産主義支配が脅かされた時の改良主義的対応

の最も顕著な例がゴルバチョフ路線である。ポーランドの場合と同じように、ゴルバチョフもまた体制改革のために国民の相当の支持を必要としており、国民を活性化させようとしている。彼が失脚するという可能性はありえないが、もしそうなった場合でも彼が取り組もうとした問題は解決されず、かえって逆に悪化しよう。それはソ連にとって緊急の課題であるため、やがて後継者が登場してこよう。その上、いったん解放された社会的な諸力は、ビンの中から解放された悪霊のようなもので、容易には統制することはできない。

ゴルバチョフが開始したプロセスは、ポーランドの政府当局者内部の改良主義者たちにとっても有利な環境を作り出しており、彼らの影響力を強めている。さらに、ソ連のエリートたちの間での対立は、ポーランドの党＝国家機構内部の闘争に油を注ぐことになろう。モスクワの各グループはここワルシャワで支持者を獲得しなければならないからである。この闘いが激しければ激しいほど、当事者たちは社会的圧力に対してより敏感になるであろう。その上、ソ連は今日においてさえ、改革派を脅迫するためにポーランド政府当局によつ

て、しばしば呼び出される悪霊たることをやめていない。

新しい運動の構造

この状況はその圧倒的大部分が「連帯」によって形成されたが、「連帯」自身はこれに実践的にも心理的にも適応できていない。

公式の新聞がわれわれの生活の本当の問題を取りあげ、その真実について書くという状況の下では、地下出版物はいかに最良のものであれ、これに対抗しようがない。同様に、さまざまな集団、組織の利益が公認された機関によって代表される時、いかなる地下組織もこれには対抗できない。

このことはもちろん、地下出版物や非合法の組織がその存在理由を失ったという意味ではない。つまるところ、それらこそが多元的社会の基礎を形ち造っているのだ。しかし、新しい状況に適合するためにはそれは抜本的に再編成されるべきである。ところがこれが、地下で形成された「連帯」活動家たちの全体的姿勢によって阻止されている。

現在活動している「連帯」組織構造はすべて、1981年12月13日以降、すなわち戦争〔戒厳令〕の開始以降に地下に生まれた。使われている言葉——戦争、地下——だけでも、運動に参加している人々の態度を決定している。

そして、つまるところ当時は、1人1人の活動家が逮捕されれば長期の投獄に直面していたという簡単な理由によっても、これらの言葉は空虚ではなかったのである。われわれが勝利しなければ、こうした長期刑に服さねばならないことは確実であるように見えた。このような状況の下では、こんな言葉で一般的な考えが述べられたのも当然である——われわれが彼らか、勝利か獄中の死か、すべてかゼロか。「連帯」指導部は支配者の共産主義者との合意についてしばしば語ったが、このような合意が可能だと考えていた者は誰もいなかったし、本当のところを言えば、そんなものは誰もあまり望んでいなかったのである。そのような努力、冒険、危険、勇気はある代償に値したが、その代償は明確な勝利でなければならなかった。

一方に存在するこうした態度と、他方における

不安と疲労、他者に対する不信がわれわれを社会の圧倒的多数から切り離している。自ら自身の優越性の確信が、不満や恨みや場合によっては軽蔑の念とともに地下の人々の間に拡がっていった。このような状況の下では、反革命と運動が達成した部分的な成功の複雑な性格に注目することはほとんど不可能だった。すべてを実現しなければ、それは何も変化しないことを意味したのである。

何も変わるわけがない——新しい情勢に「連帯」構造をすみやかに適応させる試みとして、ワレサ委員長が「連帯」の指導的活動家グループとともに公然活動を行う新指導部を任命した時、地下の人々のほぼすべてが口をそろえてこう叫びだした。重大な争いが「連帯」を引き裂き、それまで表には隠れていたその他の争いが表面化した。それは、再構築という困難な任務に集中されるべきであった時に、運動のほぼ全エネルギーを吸収してしまっていた。

組織構造はその本性からして保守的である。このことはとくに地下組織についてよくあてはまる。それに世論が及ばず、これがそれを世論の圧力に対して鈍感にする。この保守主義の結果、「連帯」の一部指導者たちは、最終的解決——もっばら独立の回復をめざす行動——を声高に唱える独立社会の一部と合流するにいたっている。これが、公的圧力を通じた改革の実現を旨とする路線を弱めている。実は、「連帯」はこの路線の中から登場したのだった。しかもこの路線は、公的生活を機能させるうえで、疑いもなく最も重要なものである。これがなければ、急進的な独立運動は孤立し、現実主義的、妥協的な運動は衰退し、あるいは最悪の場合には対敵協力に転化してしまう。

公的生活は真空を嫌う。自立的な改革の運動は「連帯」の外で、あたかもこれと敵対して——自らを右翼と定義するグループの中で——行われている。今ここで私の念頭にあるのは新リベラル派と新民族主義派である。前者は私企業の発展を要求し、これがポーランドの経済体制を徐々に静かに変化させると主張している。後者は支配者の共産主義者の頭越しに、ロシアおよび今日ソ連を構成するわが東の諸民族との協定を望んでいる。このふたつの流れに共通するのは、いずれもが社会

的な力を過少評価していることである。これだけがポーランドの政策を決めるというのに。もちろん、私企業は支持されるべきである。しかしそれは、経済改革を実現する闘いの中での、多くの要素の中のひとつにすぎない。重要な要素ではあっても最も重要なものではない。私企業は、抜本的な経済改革が行われなければ、単独では生き延びることはできない。

今は新民族主義の主張——これには私はまったく承服できないが——と論争すべき時ではない。ただ強調しておきたいのは、まったく逆説的なこと、彼らの思考が国家政策のカテゴリーに入ることである（ソ連と合意するというのは、国家政策の遂行を意味する）。もちろん、将来においてはそのような政策も可能かつ有益であると想像することはできよう。しかし未来は、現在と同じように、社会運動による行動の中で形成される——そしてこの後者は改革の綱領の中でのみ発展しうるのである。

「連帯」と独立社会の全体は、おそらく、主として新しい活動形態に基礎を置いた新しい構造を創出することによって、現在の非適合の危機を克

服できる。「連帯」の最も若いメンバーが今では30代に、圧倒的多数は40代になっていることを考えれば、なおさらそうである。あらゆる社会運動のダイナミズムは青年によって決定される。昨年秋以降、われわれが最も耳にすることの多い運動が「自由と平和」であることは偶然ではない。しばらく前からさまざまな若者たちが「連帯」のことを「老兵」といつてからかうことが多いのも偶然ではない。

公式領域でのイニシアチブ

現実から取り残されないために、わが国の状況について、ソ連ブロックの状況について、われわれの社会と運動と政府について、大々的な討論を通じてわれわれの評価を下さなければならない。会員が一致するの必要はない。しかしわれわれの観点は現実に対応していなければならない。相互にかみ合っていないなければならない。試行錯誤を通じて新しい行動形態を追求しなければならない。したがって、少なくとも初めのうち、可能なあらゆる分野において非常に多数のイニシアチブが必要で



ある。ここで指摘されるべきは、多数の職場で、既存の組織とは無関係に自発的な「連帯」グループが形成されていることである。ワルシャワの地下紙「ロボトニク」の編集局では、大部分がこうしたグループのイニシアチブに基いた労働者のさまざまな自発的行動の一覧表が作成されている。

議論と実践を通じて、部分的ながら公式に展開される、しかも自立的な行動のチャンスをいかに活かしていくかという問題に回答を見出さなければならぬ。

もちろん、こうした行動によってすべての問題を取り上げるわけにはいかない。政治的な思考、たとえば、ポーランド共和国の将来の体制とこれを実現する方法に関する考察は、このような行動を通じて形成されるわけではない。ポーランド人、ウクライナ人、リトアニア人、白ロシア人、その他東ヨーロッパ諸民族の間の相互関係の形成を、公式の領域で進めることは不可能である。それゆえに非公然の政治クラブや協会、地下出版所などが決定的に重要である。

残る問題は、各種の「連帯」組織が新しい任務に適合するためにどのように変化すべきか、である。この問題に答えるにあたり忘れてはならないのは、現在そこに存在する諸傾向が維持されるならば、地下の領域は本質的に選ばれた人々のものにとどまり、その影響範囲もそこに限定されるということである。

現在最大の重要性を有するのは、公式、非公式の領域である——協同組合、共同組合、とりわけ地域的な自治組織、協会、自立的な、しかし公認された出版所、等々。ここでは運動は大衆的性格を獲得する可能性がある。心から「連帯」に傾倒しているが、非合法やあらゆる類の混乱を恐れる人々でも、われわれが支える公式諸活動には参加できる。等しく重要なのは、このようにして、社会が自らに関して決定を下す領域が根本的に拡大する——現実民主主義的秩序をその基礎から建設しはじめるのを可能にする——ことである。私は「連帯」組織がこの種の活動に奉仕すべきだと確信する。政府当局に対して圧力をかけるあらゆる種類の行動を組織するために、各種の行動のイニシアチブをとり、専門家の援助を組織し、印刷・出版施設を提供するのだ。職場では、集会にはじまり官製新労組にいたる可能なかぎりのあらゆる公式手段が利用されなければならない。

民主主義的变化の加速

すでに指摘したとおり、公式の領域では地方的、部分的な活動のみが可能である。まさにこのゆえに、本部とか全国指導部とかが、あるいは地域的な指導部が、この種の活動について包括的なプログラムを作成することはできない。この活動は、「連帯」運動のさまざまな場において漸進的に展

グダンスク・レーニン造船所



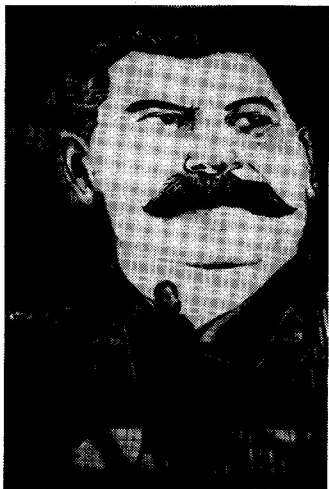
開する。

何らかの急激な変化がないとすれば、われわれは社会を主体的に教育する——とりわけ経済の分野において国家から独立した機関を建設する——長期の過程を前にしている。ところが不幸なことに、この過程は賃金格差の拡大と社会的岐枝の深化を伴う。

今後数年のうちに、ますます自主性を強めていくいくつかの経済領域と、ノメンクラトゥラが支配するいわゆる基幹産業部門との間で、必ずや衝突が生じるであろう。それは、党—国家機構内部のある程度の国民的支持を得た改良主義者グループと、党の強硬派（彼らが改革によってその地位を脅かされる大企業労働者の支持を受ける可能性も否定できない）との間の激しい対立を意味する。ソ連においてゴルバチョフの現在の政策が突然変更されることはないかと仮定すれば、この時おそらく民主主義的变化は大幅に加速化される。

全体主義システムの解体と民主主義的秩序の建設の過程が平和的な漸進的展開によって実現されるか否かを予見することは不可能である。これはおそらく、その大部分がソ連の国内情勢によって決定される。しかし、私自身の確信を言わせてもらえば、こうした変化が漸進的展開の道を経て実現されることが、ポーランド人およびソ連ブロック内の他の民族すべての利益である。

「連帯」活動家の多くが、しかもしばしば職場で活動している人々が、それほど遠くない将来に労働者の激烈なデモンストレーションを期待している。この先もずっと変らず値上げの実施と賃上げの抑制を内容とするだろう政府当局がとる政策も、同じ方向を指し示しているように見える。他方、上述した状況は激烈なデモンストレーションに導くものではない。平和の希求、危険を冒すことに対するためらい、企業心の旺盛な個人によるカネ稼ぎの機会の存在、等。しかも、経済全体における賃上げは市場における供給状況を悪化させるだけだという認識がきわめて広範囲に存在する。最後に、窮乏化の進行は大工場労働者——争議が始まるとすれば、それはここからである——の間ではそれほど深刻に考えられていないという事実が存在する。最初に窮乏化するのは小企業の、



家族数の多い労働者や年金生活者であるが、彼らは社会的爆発を引き起こす社会的勢力を構成していない。

このような爆発のメカニズムは純然たる錬金術にも等しい。それは予見不可能であり、したがってその可能性を完全に排除することもできない。しかしいずれにせよ、1980年8月の再現は期待すべきではない。何らかの社会的混乱が状況を大きく変えうるとすれば、それはただ、国家機構内部の改革推進派と改革反対派の間の争いが頂点に達し、あるいはソ連でゴルバチョフの政策が突然終止符を打たれる、といった事態と時間的に一致した場合だけである。すでに述べたとおり、この最後の可能性は生じそうになく、生じたとしてもごく短期間で終るだろう。

いかなる事態が展開しようとも、忘れてはならないのは、即応態勢とは待機の意味ではないことである。それは行動を意味する。われわれが今日、公式に活動することに積極的であればあるほど、それだけ、いかに困難な状況の下においても時の到来を待ち、あらゆる可能的チャンスをつかみとるわれわれの可能性は大きくなる。

ポーランドから見たゴルバチョフ改革：

3つのシナリオ

ヤン・ノヴァク

“Trzy scenariusze”, Jan Nowak
Kultura, Nr. 7/8-478/479, 1987

【編集部注】 前々号 [1987年11月号] に続き、パリのポーランド語誌「クルトゥラ」から、亡命ポーランド人社会によるゴルバチョフ改革の分析を紹介する。同誌によるアンケートに対する回答であるが、見られるとおり、独立した1個の論文という形態をとっている。このためアンケート項目は再録しなかった。なお、ヤン・ノヴァクは、かつて自由ヨーロッパ放送ポーランド課ディレクターをつとめた。 [訳：篠崎 誠一]

ゴルバチョフの意図と目的を、彼の意図しなかった結果から念入りに切り離すべきである。それら結果はもしかすると彼の政策の足を引っばっているのかもしれないのだ。目的とは、ソ連を転落させつつある緩慢な過程をくい止めることであるが、いずれにせよ西側との競争においてはますます後方にとり残されている。体制は機能していない。さしあたりゴルバチョフの改革にかける意気込みは効率化にかける意気込みほどではない。

没落症候群

1966～1970年の期間に年率5%を示した経済成長率は以来減少傾向を示し、1986年には1.4%を割った。もしこの傾向に変化がなければ、アメリカ合衆国は5～7年後に決定的な軍事的優位を獲得する。アメリカのテクノロジーはここ数年とてつもない進歩を達成しており、それは新型兵器の分野でも同様である。西ヨーロッパに集中配備されているソ連の膨大な数の戦車は数年後にはもしかすると役立たずのくず鉄になっているかもしれない。

経済成長を促進させるには生産性の向上が必要である。したがって、消費財の増産と国内市場を動かす産業の近代化という形での経済的刺激が必要になる。現在、軍備は重工業製品のうち44%をも飲み込んでいるが、1960年のそれは18%であった。これは、もちろん、人民の需要を犠牲にして

行なわれている。経済成長の低下にともない、社会所得に占める軍事支出の割合は上がってゆく。構造変化ぬきでソ連の諸問題がひとりで解決されるわけがない。改革は、軍備の制限および、西側からの近代的機械・テクノロジーの輸入を必要とする。

ところが原油と天然ガスの世界価格の低下によってソ連の外貨収入は1983年と比較して半分になった。地球表面の6分の1を占める大国の全輸出収入は1986年には260～290億ドルであった、要するにゼネラル・モーターズ社の収入の4分の1である。穀物輸入は1年間のドル収入の60%を飲み込んだ。現在の輸入水準を維持するためにソ連人たちは西側から今後5年間で250億ドルの借金をしなければならぬ。つまり、それは1985年末には286億ドルにのぼった現在の負債高を2倍にすることを意味する。一方、ソ連工業の近代化は同じく今後5年間に約500億ドルの西側からの信用供与を必要とするだろう。部分的な代替案として軍事関連の重工業生産を半分に切り詰め、その分を工業の近代化投資に振り向ける方法がある。

ソ連にとっての緊張緩和と政策の必要性

対外政策においてゴルバチョフが必要としているのは軍縮だけではない、西側によるテクノロジーやコンピュータ、機械類のソ連向け輸出の禁止・制限の緩和、それに、何よりもまず西側の資本



投下の大幅拡大を可能にする雰囲気づくりをも求めている。現在の緊張緩和政策は内政の必要性から強いられるものである。それはソ連の拡張政策の制限を意味するものでは全然ない。正反対だ—西側と異なりソ連人はいつも複線の政策を実行してきた。政府間の緊張緩和には戦争ぬきの征服の試みの増強が伴うのがふつうである。スターリンが同盟を結んだ戦時中もブレジネフの70年代もそうだった。それはそのまま今日も繰り返されている。会議のテーブルでは譲り合ったり、ほぼえみ合ったり、まあまあと仲直りしてみたりしながら、それとセットでアフガニスタンの軍事作戦が拡大され（パキスタン国境の爆撃）、アンゴラ、エチオピア、ニカラグアの共産主義勢力への軍事援助が増強され、中近東、バルシャ湾地域での活動が活発化し、太平洋では根拠地獲得が試みられる、等々。

ゴルバチョフとポーランド

ソ連の緊張緩和政策はすでにかかなり重大な影響をポーランドの状況に及ぼしている。ゴルバチョフは彼の世界戦略プランをつぶしたり、あるいは大幅に遅らせたりする対立は好まない。それが、おそらくは、ヤルゼルスキにポーランド統一労働者党内におけるソ連の第5列であったオルショフスキ、コチョウェク、ミレフスキ、モルチフ、グラブスキらの凍潰を許した主な原因であろう。「新

タルゴヴィツァ」（こう名づけたのはククリンスキ大佐である）が夢みていたのはソ連の銃剣による権力への到達であった。ポーランドの支配グループに対する主な恐喝手段の1つと手を切ったゴルバチョフはヤルゼルスキの策略にかなりの自由度を与えた。將軍はそれを自派の利益の範囲内で利用している。その利益を考えれば、指導部にとって不利な現在の国内勢力構造において社会との激しい対立は避けなければならない。その現われは今のところ、9月恩赦と反対派に対する怒気を含んだ寛容政策といった一方的で限られた譲歩である。將軍の本性に備わっているのは姑息な一時しのぎの政策なのだ。

ソ連の基本命題に逆う干渉回避政策は、全衛星国、とりわけポーランドに対し搾取政策をとるソ連にとって重大な脅威である。それはすでにかかなり危機的な状況にある経済をさらに悪化させ、容易に破局をもたらすかもしれない。

ベレストロイカ

ソ連の緊張緩和政策が軍縮と西側の資本・テクノロジーの相当な輸入拡大という形で十分な成功を収めたとしても、それだけで緩慢な破局の過程を押しとどめることはできない。その高踏をもたらすのがベレストロイカ、すなわち社会生活全般の再建である。しかしながら、とにかく最後までよく考えぬかれた全体的な再建計画（改革という

言葉は避ける)を目にしたいと思っても、さしあたりそれはむずかしい。変化の限界がどこにあるのか、それがまるで見えない。これまでのところ、われわれに読みとれるのは一連の緊急措置とそれに伴う探查気球である。体制健全化政策をゴルバチョフはアルコール中毒と汚職に対する闘争で始めた。コルホーズ員たちは自分の生産物の30%を自由市場で売ることができる。国家の7大コンツェルンは国家計画委員会と国有財産委員部の支配から脱け出した。社会主義企業に関する法律草案は各工場、とりわけ地方にある工場に対して自主性を今までより少しばかり多く保証している。外国貿易の国家独占は廃止され、5月1日からは各企業ごとに外国の会社と契約を結べるようになった。

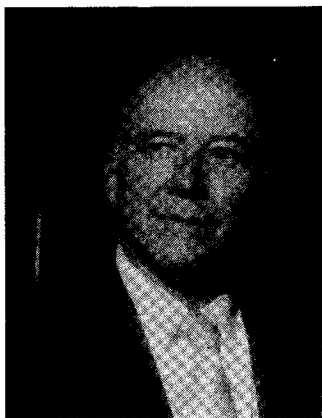
今後の変化の予測はこれまでの限られた改革よりもさらに広範囲にわたる。ゴルバチョフ政策の基本はまず第1にマスメディアの民主化にある。グラスノスチ〔公開政策〕は必要である、なぜなら、ペレストロイカが社会の支持を受けられるのは唯一これまでの成功プロパガンダが社会全般の意識にその場所を譲り渡した時だけなのだから。それを避けようとする行動はよくない、もしかすると事態をさらに悪化させるかもしれない。これまで危険を警告する徴候はただ表面的のみに知られるだけだった。しかし今日からは社会全般の意識を見透さねばならないのだ。

ゴルバチョフのペレストロイカは、ソ連自身の、また東ヨーロッパと全世界の状況を真に変革するような、予期しない結果を招きうるのだろうか？

理論的には3つのシナリオが考えられる。それを1つ1つ考えてみよう。まずポーランドにとって最も楽観的な観点から始める。

楽観的シナリオ

このシナリオはゴルバチョフがフルシチョフと同じ運命に見舞われず、それほど急には倒されないということが前提になる。クレムリンの壁の内側での数時間に及ぶもう1つの宮廷革命の代わりに、ゆっくりとした広範囲にわたる権力闘争が始まる。両陣営は外部に仲間を求め、支配グループ



ヤン・ノヴァク

の狭い範囲の外の勢力、すなわち、党官僚、軍官僚、国家官僚、KGB、創作者層、知識人、そしてついには広範な大衆を紛争に巻き込むだろう。その波はますます広い範囲に及び、最終局面では権力中枢の弱さを感じ取り始めた人びとを目覚めさせ、行動へと駆り立てるだろう。

知ってのとおり、ポーランド、ハンガリー、チェコスロヴァキアでのこれと同じようなシナリオはソ連の介入や軍の脅迫によって終わりを迎え、革命は道なかばにして途絶させられた。ソ連においてはそれと同じ過程が——十分な時間があれば——もしかすると内戦にまで発展するかもしれない。

すでに今日ポーランドの「雪解け」時代と似た状況が目を引く。50年代なかば、ポーランド統一労働者党指導部の一定の分子はスターリン的方法の継続が経済の崩壊を招くと自覚していた。ゴルバチョフの行動の基本命題は当時のポーランド統一労働者党「リベラル」派の前提条件に近い。その当時の課題は大衆を衰弱と無気力から脱け出させること、それに必要最低限の努力しかししないという形で現わされたとらえどころのない受身の抵

抗の打破にあった。また、すべての改革に抵抗する保守的分子に対抗する勢力の創造も課題であった。それは厳密に監視し、上から統制しなければならない過程であった。結果は知つてのとおり、上部は解き放たれた力を支配できず、雪解けは洪水になってしまった。

私はソ連の新聞・雑誌を英語訳で研究している。なぜなら「クルトゥラ」以外でそれらが詳しく載っているポーランド研究者および亡命者向け刊行物はたいへん少ないからである。この作業に没頭しながら私はこれはいつか読んだという錯覚を覚える。目をこすりこすり「ポプロストゥ」〔「率直に」の意、反体制派雑誌〕を、後にはまた「トリブナ・ルドゥ」〔ポーランド統一労働者党機関紙〕を読んだことを覚えている。今日、それと同じ驚きの気持でソ連の主要雑誌の1つに載った論評を読んでいる——ロシアの諸都市にその歴史的な名称を取り戻せないだろうか、レニングラードをまたペトログラードと呼んだ方が良いのではないだろうか、と言うのだ。これはもちろん何千ものうちの1つの例だ。ソ連の出版部数は今年1400万部には上がった。31年前のポーランドの「10月」(1956年)においても同等の部数が出版された。1956年のポーランドと同じように、著述家、時事評論家、新聞記者らは確信を持ってなまより自由な発言を求めて境界を走り抜け、経歴を危険にさらしながらますます大胆に、罰を受けることなくどこまで前進できるかを試みている。

類似はこれにとどまらない。はじめのうちびっくりしていた党内保守派は気をとりなおし、団結を強めて反攻に移る。誌上の論争はますます激しさを加える。最も興味深い現象はスターリン的サミズダート〔自主出版〕である。はじめてこのことに注意を向けたのがユーゴスラヴィアの記者ドラゴ・ブウパチであった（「ソ連・東欧論文案内」1987年5月4日号に載ったスロボダン・スタンコヴィチの論文から引用）。経済学博士のB・イサーエフはモスクワで非合法のパンフレットを配り、ゴルバチョフの計画に鋭い批判を投げかけている。イサーエフはスターリン時代への郷愁を込めて、「社会主義的工業化」の歳月における経済成長の原則と水準を持ち出す。現在の経済成長鈍化の原



因をイサーエフはユダヤフリーメイズン組織による国際的および国内のスパイ活動に見る。

反ユダヤ主義のスローガンとともにレーニンの伝統への回帰を呼びかけるキャンペーンをとり上げたのは民族主義グループ「パーミャチ〔記憶〕」である。われわれがポーランドで目にしたのとまったく同じことが繰り返されている。反ユダヤ主義はスターリン主義者の古典的な武器であった——最初がナトリン、そしてモチャル派のバルチザンたち、最近ではオルシヨフスキの「グルンヴェルト」。「ユダヤ」という言葉は「自由主義」の同義語である。ポーランドで目覚めさせられた反ユダヤ主義とユダヤ人スパイ説は生活環境悪化の真の原因から目をそらさせるばかりでなく、同時に改革の信奉者の信用を落とすものでもあった。それと同じことが今ロシアで起きている。あるいはこの現象にはそれほど大きな重要性を与えるべきでないのかもしれない、しかし「パーミャチ」のゴルバチョフ攻撃は異常に激しいものであったし、しかもこの組織の代表は5月6日にモスクワ市第一書記で中央政治局員、ふつう書記長の同志と見られているボリス・エリツィンと会見してい

るのだ。この種の掲見（非合法組織との）はこれまで前例がない。スターリン的地下活動は上部に庇護者を持っているのではないか？

ゴルバチョフに対する批判はまた改革の信奉者にも向けられている。『ノーヴィ・ミール〔新世界〕』誌6月号でニコライ・シメロフはゴルバチョフよりもさらに先に進み、補助金と公定価格の廃止、自由市場制の導入、中央による計画からの離脱、それに、合理的経済活動から不可避免的に派生する失業の容認を要求してこう言う——「1963年と1965年の時と同じく、ふたたびわれわれは一時しのぎを強いられている。しかし一時しのぎは時に何もしないより悪いことがある」。

結果として、ゴルバチョフの政策は両極化と闘争激化を招いている。当面は言葉のうえで。第1ラウンドは6月の党大会における社会主義企業に関する法律草案を議論する場で行われるはずである。

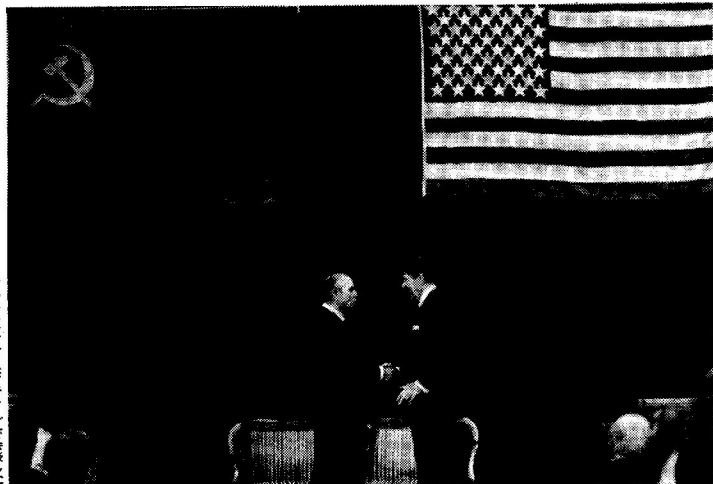
悲観的シナリオ

ベレストロイカと公開政策がゴルバチョフの突

然の失脚あるいは全面降伏とブレジネフ時代の停滞への逆戻りによって終わりを告げる可能性はかなり高いと思う。モスクワの西側外交官たちはレーガンの任期切れ前にゴルバチョフ時代が終わるだろうという見方をしている。

多くの状況がその見方を支持しているし、書記長は政治局内でも孤立しているように見える。彼は実際チェルネンコの後継者選挙の時にグリシンに投票した全員を（ウラジーミル・シチュルニツキーは例外）解任している。しかしゴルバチョフに手引きされた新任政治局員たちは再建政策への参加の面では彼に遠く及ばず、また、党を代表するイデオログであるイーゴリ・リガチョフ、それに首相のニコライ・ルイシコフは行間に部外者には了解不能なニュアンスをこめてゴルバチョフを批判している。ソコロフ將軍の解任と軍が初めて政治局内に完全な資格を有する代表を持ってなかったという事実そのものが、軍は書記長の同志ではないことを示しているように思える。

ゴルバチョフはベリアの粛清時代以来、最も徹底した粛清を行った。1986年の最後の党大会の時に中央委員の40%が入れ替わった。党の基幹組織



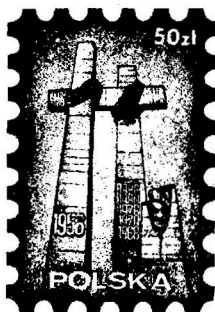
一九八五年十一月ジュネーブで会談したゴルバチョフ書記長とレーガン大統領

段階では23%が新人に替わった。しかし、これらの新しい人びとすべてがベレストロイカの心酔者であるとは限らない。

ロシア人の性格的特質からして、大衆を目標めさせ活動へ駆り立てる過程はポーランドやハンガリー、チェコスロヴァキアよりも長い時間がかかるだろう。支配体制の非中央集権化はソ連諸民族の自立拡大を意味し、それは大ロシアのショーヴィニズム的反動に出会うことになろう。最も危険な敵はもちろん官僚機構であり、それは汚職追放闘争と複数候補による選挙構想にとっての脅威となっている。官僚たちは再建政策の中に自分たちの地位の転覆を見ているのだ。

ソ連の新聞・雑誌の研究から判断するに、ゴルバチョフは創作に携わる知識人の動員とかれらの支持取りつけには成功している。疑問は、それと同じことが労働者についても言えるかどうかである。これまでの変化はかれらの状態をより良くはしていない。住宅と食糧の状況は改善されていない。アルコール中毒撲滅キャンペーンの結果、ひと瓶のウォッカを手に入れるためには行列に2時間も並ばなければならない。アルコール消費量は37%減り、国家から収入が160億ルーブリ失われ、そして労働者はゆううつな現実から逃げ出すたったひとつの手段が奪われた。重工業における厳密な品質管理システムの導入は今年の最初の2カ月間で生産高を3.6%減らした。1900の企業がこの管理システムを採用し、いくつかの工場は閉鎖に追い込まれ、検査に通った製品はたったの83.9%であった。労働者たちは手痛いボーナスの損失を被った。これがカマ河トトラック工場における労働者の暴動と抗議を招いた。労働者の不満は、1956年ボズナン事件のロシアにおける再現を招くかもしれない。両者の違いは、当時のポーランド国内勢力構造の中でボズナンは「10月」への道を開く触媒となったのに対し、ロシアにおいては広範囲にわたる暴動鎮圧と同時に改革は終わりを告げるのである。

ソ連体制における宮廷革命はふつう政治局での、その後中央委員会での、不意打ち選挙という形をとる。不意を突くためには深謀遠慮の準備活動を必要とする。もしかすると私がこれらの言葉を



記している今この瞬間にも誰かがゴルバチョフに対する陰謀に取りかかっているかも知れない。おそらく、1989年に行われるはずの第28回党大会（通常より2年早く、新しい5カ年計画の採択前である）前には結果が出るだろう。

可能性の小さいシナリオ

第3の、最も可能性の小さいシナリオも排除してはなるまい（少なくとも理論上は）。——ゴルバチョフの政策が成功して、軍縮、資本流入、工業近代化、下部構造再建、支配体制合理化、工業近代化、生活環境改善、が達成される。すべてのプロセスが彼の思惑どおりに進み、上から指導・監督される。ソ連はベレストロイカから力強く立ち上がる。あまり現実的な見通しではない。現実の改善には革命的变化、すなわち体制そのものの全面変革を必要とするのだ。

もし悲観的シナリオ通りに事件が起り、ゴルバチョフが解任されたら、あとはどうなるだろう？ それはただ楽観的シナリオの先送りを意味するだけだろう。全般的经济状況の悪化に伴いソ連はますます西側諸国の背後に取り残される——プラグマチストとみずから狭き門を階級的利益を守ろうとする保守主義者たちとの間の内部紛争が増大するだろう。最終的局面においては日々の生活からの圧力が死んだドクトリンに対する勝利をもたらすに違いない。

1987年6月9日 ワシントンにて

地下新聞の信頼性

ミハウ・コウォジェイ

Truth — cui bono!, Michał Kołodziej
East European Reporter Vol. 2, No. 2, 1986

【編集部注】 ポーランドの地下新聞には様々な情報が掲載されている。果たしてそのすべてが信用できるのか？ この問題に関して、数年間地下出版にたずさわった人物が論じた論文を紹介する。公安警察によるニセの地下新聞など興味深い例があげられている。

ポーランドの地下出版

地下出版自体は何も新しい現象ではない。ポーランド民族が隷属の憂き目にあい、自由な思想の交換や公表ができなかった時、地下出版は常に存在した——19世紀の3国分割時代、ナチとソ連による占領時代、そして共産主義を押しつけられた1945年以降。だが戦後最初の活発な出版活動が行われた1949年までの時期を過ぎると、スターリン主義のテロルによりその活動は弱体化し、ほとんど壊滅状態となった。地下出版の再興のきっかけとなったのが、1976年6月のラドムとウルススの労働者デモでの流血の弾圧に対して社会的反対運動の波を起こした労働者防衛委員会（KOR）の結成である。KORによる無検閲新聞や書物の発行は、たちまち後続の同様な運動を生み出した。1980年8月の「連帯」誕生後、独立出版運動は大衆的性格を獲得し、それは1981年12月の戒厳令布告後も失われることはなかった。以来、ポーランド全国で千を超す地下出版物が出版されている。その傾向の多様さ、出版物の種類が多さ、発行部数の多さは他の社会主義国に類を見ない。

地下新聞・雑誌は、以前なら目の目を見なかったような無数の情報を紙面に載せており、現在のポーランドでの生活に関する最も重要な情報源となっている。西側の特派員たちには今やこれが広く情報源として使われているし、情報流布に関係した西欧や米国の様々な団体も同じである。地下新聞・雑誌は様々な経路によって大量に西側へ流

れてくる。

しかし、現在のポーランドの地下報道の特殊な性格、つまり記事を書く人々の置かれた環境や、非合法出版であるという状況や、編集者と読者の複雑な関係を考えて、われわれは地下出版物の情報の信頼性を検討する新しい方法を開発する必要がある。

この点を論じる前に、地下報道と世論との相互関係について考えてみよう。

いかなる社会においても、報道には二重の機能がある——世論を形づくる機能と、世論を代表する機能である。全体主義体制の国では、後者の機能は最低限にまで押えられている。公式報道は支配党の利害を全面的に支持する国家検閲により厳しく監督される。ポーランドにおいては、歪曲されざる情報への渴望と、世論を代表する報道への熱望とが、1976年以來の、国家から独立し検閲を受けない出版物の爆発的広がり最大の理由であった。だが、はたして地下報道は本当に読者の意見を代表しているのか？ 疑いもなく、そうしようと努めているし、能力の及ぶ限りそうしている。能力の及ぶ限り——だが残念なことにその能力は十分には大きくない。地下出版物の作成にたずさわる者とそれを援助する者の秘密を守る必要性は、民衆との接触を極めて困難にしている。読者から編集者への手紙や電話はまずありえない。そのため、地下出版の編集者—読者関係は別の形を取らざるを得ない。一部の地下新聞は読者に質問表を配布して意見の吸収をはかっている。だが、回答数は全読者を代表しているとはいいがたく、得ら

れたデータも不完全である。そういうわけで、地下報道の執筆者や編集者は社会の姿勢に関する自身の知識と直観に頼らねばならない。地下報道の多数の支援者のほとんどは、ポーランド人民共和国市民として全く普通の日常生活を送っている。地下報道とのかかわりを隠したまま、彼らは周囲の人々の会話や意見に耳を傾け、その観察をジャーナリストとしての仕事に生かすのである。特に当局に目をつけられている地下紙の場合、配布は「手から手へ」を原則とするので、配布者には読者の反応を直接知る機会がある。

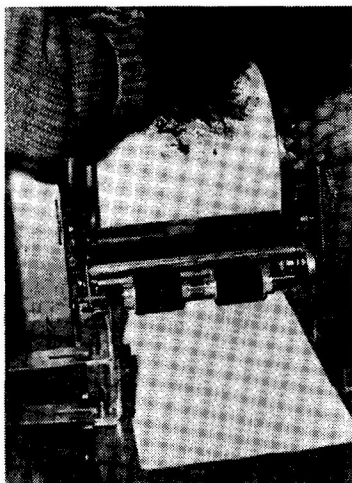
現在のポーランド地下報道の信頼性の問題に戻ると、それををはかる最良の方法は、従来歴史家が文書の信頼性を調べるために用いてきた方法、つまり内的証換と外的証換を見るやり方である。この場合、外的証換とは、ある地下出版物が本物であるか、すなわち、それが本当にそこに書かれたグループや組織によって出版されたものかを検証することである。内的証換とは、地下出版に載せられた情報の信頼性の検証になる。

外的証換——ニセ物にご用心

地下新聞を手にする時は、それがポーランド人民共和国の法律で禁じられた活動を行っているグループにより作られていることを忘れてはならない。このことは、公安警察（^{シベ}SB）が地下新聞の摘発に努めており、必要に応じてはこのグループの社会への影響力を弱める方策を講じもすることを意味する。そのために時として用いられるのが、ニセの地下新聞を作って出回らせる方法である。一般的にこのニセ物は本物と全然変わらない体裁をとっており、一見ただけでニセと見破るのは不可能に近い。ニセ物作成にあたってかなりの注意が払われているということだ。

これまでに発見されたものからみて、SBのニセ物作りには3つの手法がある。

1 標的にする地下新聞のひとつかふたつの論文をSBの作った論文とすりかえる。本物が発行されるやいなやそれを入手し、ある論文のかわりにニセの論文を入れたものを作成する。こうして作られたニセ物は、本物と見かけが変わらない。



読者にとっては、どの論文がニセ論文かを見分けるのは非常に難しい。時にはSBはその新聞の最新号の出るのを待ちきれず、又は最新号の出る前にニセ情報を流す必要に迫られて、手持ちのバックナンバーに細工をすることもある。

2 SBはまるごとニセ物の地下新聞を作成する。通常は記事・論文のうちひとつかふたつが挑発用のニセ物で、残りは他の地下新聞から取った本当の情報（時には当局を攻撃する論文も）である。

3 地下報道の周辺にもぐり込んだSBの手先の情報提供者により、SBの作った文章が地下報道編集部に渡される。もしこれが掲載されれば、読者がそれをニセ物と知る唯一の手段は、後の号で訂正記事が載るかどうかである。

3つの方法のどれをとっても、ニセ物と見破るのは極めて困難である。同じ地下紙の、間違いなく本物とわかっている別の号と、印刷技術や活字を比較すればよいと考えるかもしれないが、ここではその方法は使えない。というのも、秘密裡の出版を守るためタイプライターや印刷機はしょっちゅう違うものが使われ、同一の号の印刷中に変



えられることもある。地下紙を印刷する紙にしても、通常はあちこちから集められ、質も色もまちまちである。こういう状況下でタイプフェースや紙質によってニセ物かどうか判断しようとするのは的はずれであろう。

ニセ論文を本物として扱う失敗を避けるための一法は、手にした地下紙をまずニセ物と思い、しかる後に、地下運動の組織系統や、その新聞を出しているグループの政治的傾向や、それぞれの政治問題がその時点で地下運動によってどう扱われているかなどについての詳細な知識をもって、注意深く読んでゆくことである。もし疑いのある情報にぶつかった場合は、他の地下紙で確認できるまでその情報は用いるべきでない。

ニセ物の手がかりを捜す上での最初の注意信号は、ある地下紙に、同一号でありながら内容の全く違う、あるいは一部違う2種類のものがほぼ同時に出現することである。

上述の3つの方法で作られるニセ物のうち、1によるものはまだ見つけやすく、2によるものはより難しい。いくつか例をあげよう。

1985年末、グダンスクの「連帯」メンバーとその協力者グループにより出版されている雑誌「わ

れらの時代」の第53号が出回った。これにはレフ・ワレサの署名のある同年10月13日の国会議員選挙の投票率についての2つの文が載っており、特定の都市について投票率の数字があげられていたが、その数字はワレサが西側特派員に語ったものと違っていた。特にポーランド当局がワレサに対し、投票ボイコットに関する嘘の情報を流していることと非難していることから考えると、これは明らかに疑わしい。

この疑いは他の面から裏付けられた。ワレサによるとされる問題の文章の日付は1985年10月14日と15日であるのに、他の記事はそれに比べかなり古く、これによりニセ物であることが明白となったのである。このニセ物は、「われらの時代」の43号（同年6月号）をもとにして作られていた。問題の「53号」とこの43号を比べることで、疑う余地はなくなった。このニセ物は、1の方法で作られたものだった。

一方、2の方法は1982年夏に『週刊マゾフシェ』のニセ物を作るのに使われた。『週刊マゾフシェ』はワルシャワ地域の地下「連帯」による週刊紙であり、おそらくは数ある地下紙の中で最も広く読まれ名声も高い。この『週刊マゾフシェ』の同じ

号数(第22号)と日付(1982年7月28日)を持つ2種類の版が地下配布網に現われたのである。そのうち片方には、「連帯」の地下指導部である暫定調整委員会(TKK)の出したと称するアピールが掲載され、当時のTKKメンバーのズビグニェフ・ブヤク、ヴワディスワフ・フラシニク、ヴワディスワフ・ハルデク、ボグダン・リスの署名が付されていた。事情通の読者なら、7月28日付のこのアピールに、7月中旬にTKKメンバーとなったエウゲニウシュ・シュメイコの署名がないことでおかしいと気付いたろう。アピールを注意深く読むと、ニセ・アピールの作者の意図がはっきりと読みとれる。これは、「連帯」を生んだ1980年8月のストライキ勝利の2周年記念のデモに人々を参加させないために書かれたのだった。このアピールがTKKによって出されていない証拠は、アピールの中の次のような文章にも見てとれる。

「ポーランドの労働運動のために、われわれは『連帯』のすべてのメンバーに、ポーランド国内および国外でのあらゆる抗議行動を3カ月間停止するよう呼びかける。」

また、

「われわれは全世界の労働組合指導層に対し、ポーランドの社会政治状況を悪化させるような行動を差し控えるよう呼びかける。」

日頃地下紙で伝えられるTKKメンバーの意見やTKKに投げかけられている疑問を知っている人にとって、「連帯」メンバーは国内でのデモ参加を停止せよとのアピールは必ずしもあり得ないことではないと受けとれる(デモを呼びかけて、警察機動隊(ZOMO)や警官隊の暴力的な弾圧に人々をさらすことが道徳的に許されるのかという疑問が提示されていた)。しかし、TKKが外国の労働組合指導層に抗議行動停止を呼びかけるなどおよそあり得ない。注意深い読者ならこの文章に疑いを抱いたに違いない。

ニセ物作者たちは、このアピールをより本物らしく見せるため、ズビグニェフ・ブヤクとの架空インタビューをでっち上げ、その中でブヤクのように発言させた。「われわれは外国の意向も考慮にいれねばならない。彼らはポーランド情勢

が実際に不安定になることを望んではいない。アメリカは少々やり過ぎてしまい、引き返す方法が見つからずにいる。」「WRON(救国軍事評議会、ヤルゼルスキの軍事政権)に、長期的展望に立ったと称する公約の実行のために3カ月の時間をやるうではないか。」「外国には、われわれの組合と何ら共通の利害を持たない無責任な人間が多数いる。連中は『連帯』の旗で仮装し、それを自分の幸運をつかむ道具として使っている。」これらの発言はこのインタビューがSBの専門家による——それもかなり稚拙な——でっち上げであるまごうかたなき証拠である。

ニセ物の発見は、SBがニセ物の作成と流布で何を目論んでいるかを理解する一助になる。SBの主目標は次のようなものである。

——人々の態度に影響を及ぼす

——特に目の敵とする地下活動家や地下新聞発行グループを中傷する

——地下活動グループ内の相互不信やグループ間の対立を生じさせる

——人々を挑発する

内的証拠

内的証拠の検証は、ある地下紙の伝える情報が実際に正しいかどうかを見極める手だてを得ようというものである。

この分析方法の基本的困難は、地下報道を書いている者が匿名である点である。何人か(そのほとんどは地下潜伏者)は本名で書いているが、残りはペンネームを使い、中には1人でいくつかのペンネームを持つ者もいる。信頼できる正しい情報を伝えることで一定の信用を得た者がペンネームを変えた場合、再び信頼を勝ち取るまで一からやり直さねばならない。新しい名前の登場が新たに地下紙での仕事を始めた者の存在を示すのか、以前からの執筆者が名前を変えただけなのか、知るすべがないのである。いずれにせよ、地下紙執筆者のペンネームの索引の作成は極めて有益である。この索引は、個々の執筆者の情報信頼性、政治的傾向、社会的・政治的な様々な事件・風潮に対する態度について注目しつつ、常にアップ・ト

ウ・デートに保たねばならない。

ある文章の内的証拠を検討する時は、次の3つの間による分析が必要である。

1 執筆者は真実を伝えることが可能であったか？

2 執筆者は真実を伝えることができる立場にあったか？

3 執筆者は本当に真実を伝えることを望んでいたか？

1 執筆者がある真実を知っており、それを伝えたいと望んでいると仮定して、それを実際に（この場合、合法的な報道機関を通じて）人々に伝えようとする際に最もしばしば直面する根本的障害は、検閲である。検閲は合法的メディアに執筆する者すべてに適用される。ポーランド人民共和国では、一般配布を目的とする印刷物はことごとく（死亡公告や名刺に至るまで）検閲局にチェックされる。検閲を行っているワルシャワの報道・出版・娯楽中央局は、政府当局に不都合な情報はひとつも公の目に触れさせないようにしている。

本来的に国家や国家機関から独立したものである地下出版には、この抑圧が及ばない。それゆえに地下出版は非合法とされ追及の的となっているわけである。地下出版は検閲を受けないという事実は、つまり、それが公式報道とくらべて格段に信頼できることを意味する。

ポーランドの地下で通用している原則「すべての市民は自由な意見表明の権利を持つ」に従い、地下出版にはモノ書きに対する統制機関は存在しない。地下報道には多種多様な政治路線の出版物があり、誰でも自分の意見に近い地下紙を見つけ、またその紙上に文章を発表することができると言って過言ではない。

それゆえ、もし地下紙に載った情報に疑わしいものがあれば、それは執筆者が誰かに妨害されたために真実を書くことができなかったというわけではないと考えられる。

2 ポーランドの地下報道の場合、記事の信頼性は原則として執筆者が真実を伝えることができる立場にあるかどうかにか左右される。人が真実を

伝えられるのは、その真実を自身で知っている時に限られる。真実を知っているというのは、直接それを見聞したか、又は100パーセント信頼できる第三者からその情報を得たということである。

秘密裡に記者活動をしている者は、情報源への迅速な取材手段を持たないのが普通である。名前が割れる危険があるため、電話の使用は困難だしテレタイプや電報などは事実上利用不可能である。数少ない例外を除き、地下報道グループのほとんどは全国的な通信員ネットワークを持っていないか、あってもかなり不完全である。「地下報道エージェンシー」がいくらかはこの問題の克服に役立っているが。

このことは、地下報道の情報が必ずしもチェックされていないことを意味する。間違いや不確実な情報が流れることもしばしばである。

執筆者が真実を伝えられる立場にあるかどうかを考える際は、次の点を見なければならない。

——その情報は、その地下紙が発行された場所と関係があるか？（ある工場に関する情報がその工場の労働者の発行になる地下紙に載っていれば、その情報は信頼性が高いと考えられる。執筆者は、直接その記事内容を見聞して書いたと思われるからである。）

——その情報は、全国的視野と独自の通信員ネットワークを持つ地下紙（『週刊マゾフシェ』、『KOS』、『戦う連帯』など）に掲載されているか？

——その情報は、当の出来事の直接の目撃者多数により裏付けられているか？（たとえば、大工場のかなりの割合の労働者が参加したストライキについての情報などは、真実の可能性が極めて高い。）

——その情報には、その出来事に関して具体的な数字、日付、参加者の名前などが含まれているか？これは、筆者が情報源から直接取材したかどうかを示す。（たとえば、学校構内からの十字架撤去キャンペーンが激化している、というだけの情報は正確さに欠け、信頼性が低い。だが、もしその情報が具体的な例を伴っていれば、かなり信頼性が高くなる。）

情報が正しいか確かめる最も確実な方法は、他

の地下紙、とりわけその情報の言及する出来事の起きた場所で発行されている地下紙に、同じ情報が載っているか調べることである。地方の地下紙に他の地方のニュースが出ている時は、常に慎重に対応せねばならない。実際、そういうケースでは情報が伝わる途中で変化することがかなり多い。ひとつ例をあげよう。『連帯・グダンスク地区新聞』の1984年第12号に、同年6月25日にシロンスク地方のシェミアノヴィツェにある「マクロン」工場をヤルゼルスキ将軍が訪問したという記事が載り、その後『週刊ゾフシエ』第99号にも転載された。このニュースが自由ヨーロッパ放送〔西側の東欧向け放送〕からも流されたところで、イエジ・ウルバン政府スポークスマンが外国人記者との記者会見でこれを否定。グダンスク『連帯』紙編集部はそこで記者をシェミアノヴィツェへ送り、情報をチェックさせた。その結果、同紙は第18号（1984年11月15日付）で、詳しい報告を行った。実際にはヤルゼルスキ将軍の訪問は予告されたものの実現せず、当日は別の党高官数人が工場を訪れたことが判明した。最初の誤った情報を記事にした者は、はるかシロンスクから届いた情報をチェックする機会がなかったのである。編集部の説明の最も重要な部分は引用に値しよう。

「地下報道は当局のプロパガンダ報道と比べて100分の1も取材手段を持たない。そのうえ、密告、逮捕、投獄の絶えざる脅威のため、常に不本意な環境下で活動している。それゆえわれわれは自身の能力と直観だけでなく、情報提供者の善意と正直さと正確な観察に頼らざるを得ない。とはいえ、われわれの提供するニュースはほとんどの場合正しく、歪曲や誤報は稀である。」

3 執筆者が常に真実を伝えたいと望んでいるかといえば、必ずしもそうではない。真実が執筆者やその属するグループにとって不都合な場合もある。そういう時、執筆者が客観的に知っている真実を慎重にゆがめることがあり得る。

ポーランドの過去40年にわたる検閲と情報操作は、公式報道がウソと同義語になるほどに報道の信用を失墜させた。1956年、68年、80年の社会変動の際の集会やデモでは、当局は社会意識操作の



地下報道

ために恣意的な報道を行うのをやめよとの要求が声高に叫ばれた。地下報道にたずさわる者は、自由を旨とする地下社会の一員として、地下報道の人気と評判を保つ最大の保証はその信頼性にあると自覚しているはずである。報道全体への多くの人々の不信を克服できるのは、地下報道が可能な限り真実の情報のみ伝える——たとえそれが執筆者や出版者に不都合であろうと——という原則を厳しく守った時のみなのだ。

おわりに

地下報道に数年間たずさわった経験に基いてこの文を書いたが、これは地下報道の情報の信頼性を調べる処方箋にはならない。ただ、(歴史家が文書資料の信頼性を調べる際に使う)古典的な方法を、それとは違う種の資料の信頼性評価に用いて結論を出すという最初の試みである。

〔訳：高橋 初子〕

最近地下出版事情

ヤン・クリンチ

Recent Underground Publications, Jan Klinec
Uncensored Poland News Bulletin, No.18/87, 11 Sept.1987

【編集部注】 1987年5月～6月のポーランドの地下出版について述べたこの論文は、地下紙『週刊マゾフシエ』第218号(1987年7月29日付)に掲載された。

最近の潮流

最初に驚くべき出来事をひとつ——ククリンスキの「自国民に対する戦争」〔ヤルゼルスキの副官のひとりであった軍将校の著者が西側に亡命後、当局の戒厳令導入準備について書き、パリの『クルトゥラ』社から出版したもの〕が9種類出版された。最初にワルシャワに届いた地下版は、プシエムイシルで出版されたもの(価格=135ズウォティ)である。2番目はヴロツワフの『アスペクト』社。ここはクルトゥラ版のテキストを入手できず、ヴォイス・オブ・アメリカ放送の聞き書きをテキストとした。その後様々な出版所からの出版が続いた——『ムイシル』(250ズウォティ)、『CDN』(250ズウォティ)、『法律—政治出版所』(250ズウォティ)、最後に『モスト』の特別版(250ズウォティ)。「クルス」から出版された版には値段が書かれておらず、配布の際に無用の混乱を生じさせるものとなった。一部の配布者は300ズウォティを支払い、他の者は250ズウォティを支払うといった具合である。ほかに「自国民に対する戦争」にはシチェチンの『オプラス』版と出版所不詳の『クルトゥラ』版の複製がある。どれもたちまちに売り切れ、増刷を望む声が高い。

地下出版のもうひとつの潮流は、ユゼフ・マツキエヴィチとその作品の再評価である。彼の作品はコンスタントに出版され、よく売れている。ある版が売り切れになるとすぐに次の物が現れる。

だが、広い需要があり、中小の独立出版所が大きな関心を持っている割に、『ノヴァ』、『クロンク』、CDNといった大手はそれほど情熱的でない。独立出版所の中にはマツキエヴィチ全集の刊行を計画している所さえある。マツキエヴィチ人気は彼の作品のみならず彼に関する評論、研究、エッセーへの需要も生み出した。彼に関する研究書はまだそう数多くは地下出版されていないが、最近のものではイエジ・マレフスキの「真実のみが興味深い」(ポコレーニエ社、価格不明)をあげることができよう。

歴史書・回想録に人気

地下出版の数ある人気作品の中でも一番人気の高いのは歴史研究書(とりわけポーランド現代史)や回想録である。歴史分野のベストセラーには、クリスティーナ・ケルステン「ポーランド政治史 1944～56」(ストブ社、580ズウォティ)、イエジ・アルベルト「ポーランド史 第3巻」(クロンク、450ズウォティ)、ミハウ・ティモフスキ、ヤン・キエニエヴィチ、イエジ・ホルツェル共著「ポーランド史」(スポトカニア社、850ズウォティ)、マレク・ワティンスキ「ひざまづきはしない——1940年代の反対派」(ビェフル社、1500ズウォティ)、ウカシュ・ソハ「喪服を着た世代——死刑囚たちと裁判官たち 1944～54」(ノヴァ、批評叢書、1000ズウォティ)等がある。

回想録の売れ行きは、テーマと著者による。ベストセラー回想録の代表はスタニスワフ・ミコワイチクの「ポーランドの凌辱」(戒厳令叢書、800ズウォティ)である。この本は何種類か出版されており、うちいくつかは別のタイトルになっているため、同じ中身と知らずに買ってしまった読者

が返品するケースも起きている。……あまり有名でない著者の回想録を売るのはかなり大変なことだが、それでもユゼフ・ザトル＝ブシトツキ神父の「日記」（アスペクト）などはあっという間に売り切れた。

シベリア抑留経験者の回想録は大きな関心を持たれている。ポーランド＝ロシア関係史の「空白」の中でもこの部分は最も悲惨なものであろう。ベアタ・オベルティンスカの「囚われの家にて」（アスペクト）はほとんど入手不可能となっている。著者は戦後すぐに回想録を執筆し、ルヴフの「ブリギトキ」グループでの体験からシベリアの収容所生活、そしてアンデルス將軍の率いるポーランド軍団とともにソ連を出国したことを書いた。ソルジェニーツィン並みの才能あふれる作品である。他に、マリア・ピルスカ「流刑からの逃走」（「連帯」中東部地区情報文庫）、カジミエシュ・オスタシェフスキ「シベリアの長い道」（MSS）などがあり、またヴィクトリア・クラシニェフスカの「解放後」（ポコレーニェ社）の人気は、その粗悪な印刷製本技術にもかかわらず、「連帯」特別賞に値すると思われる。

第2次大戦関係の出版物には固定的読者がいる。地下出版配布者に聞いたところでは、この人々は街の普通の書店でも同じジャンルの本を求めるのだという。このジャンルの本は、赤軍と戦いヴィリニェス近郊で戦死したマチェイ・カレンキエヴィチの伝記である2巻本の「オストラ・ブラマへの道」（ヤン・エルドマン著、クルス社）であろうが、ボレスワフ・トマシェフスキとヤン・ヴェンギェルススキ共著のルヴフのAK（ポーランド国内軍）に関する小冊子（ポコレーニェ社）であろうが、何でもすぐに売り切れてしまう。ちなみに、後者【小冊子】は、「ルヴフ文庫」というシリーズの一冊として出版されたものである。ルヴフ関係の出版物にも固定読者がおり、ルヴフについての詩集（ポコレーニェ社の「とこしえに忠実なり」）も出ている。この詩集は配布網に乗ったのが少し遅かった——4月に売り出さなければイースターの贈り物に買う人も多かったろう。

ソ連、チェコ、ハンガリーの地下出版物への関心も高い。……この分野での中心的出版所はノヴ



『ノヴァ』の印刷風景

アで、イジ・グルス「質問者」、ヴァツラフ・ハーベル「誘惑」、アレクサンデル・ジノヴィエフ「輝ける未来」、ヴェネディクト・イェロフイェフ「ワルブルギアの夜」などを出している。……

出版者への評価と不満

ノヴァ系列の出版物は評価が高い。今入手可能なものには、ジェモヴィト炭鉱のストライキ労働者とのインタビュー集であるイェジ・ファイラント「子供たちは何と言うか？」（モスト）、ズビグニェフ・ブヤクの逮捕（1986年5月）直後に企画が立てられた彼の著作集「一度語られた真実」（ノヴァ）などがある。配布者たちは、もしこの本がブヤクの釈放（同年9月）以前に世に出ればベストセラー1位間違いなしだったのに、今ではそれほどの人気はない、と言っている。

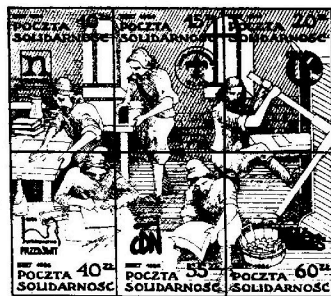
私が会った限りでは、イゴール・ネヴェルリの「神の饗宴の残り物」やヤツェク・トシナデルの「家の恥」を在庫に持っている配布者は皆無だった。ノヴァでは増刷を約束しているのをそれを待つばかりではない。配布者が一様に口にする不満は

さほど読者に人気のない小冊子が多数あることや、編集上や技術上の不備についてである。著者紹介が何らなされていない、著者名が本名なのかペンネームなのかわからない、執筆時期はいつか、以前にも出版されたことがあるか、何を出版としたのか、などの不明なものが非常に多い。著者が有名でも売れないことがある。たとえば、イェジ・スルディコフスキの当局への公開書簡「終わりなしでなく」(モスト)や、ヤドヴィガ・スタニシキスの「合法化なき鎮静化」(ヴェルス)、レシエク・モチュルスキの「私は有罪ではない」(ポコレニェ)などである。小冊子の需要が少ないのは、読者が、短い論文などはあまたある地下新聞や雑誌に載せるべきと考えているためであろう。不幸なことに、ウラジミール・ナボコフのエッセー「ロシアの文学、検閲、読者」も売れ行きはかばしくなかった。ナボコフの小説や講演集なら何であれあつという間に売り切れるのだが。

ある配布者の話を紹介しよう——「小冊子是一般にあまり売れないね。だから僕は小冊子は数部程度しか在庫にしないよう努めている。本なら多少高価でも300部くらい簡単に売れる。ただ、たとえばM・ウォジェンスキの「全方位への拡大」やN・ビェトシヤクの「ロシア型秘密警察」のように数十部しか入荷しないものでも、何冊かは在庫がある。なぜ全部売られないと言われるだろうが、そうなることがあるんだ。たとえば、誰かが地下出版物の代金を払うかわりにラドヴァンスキの「炎の家」を渡してることがある。こういう時機はどうすればいいと思う? その本を受け取らず、あくまでも現金で払ってくれるのを待ち続けるか、それとも、その本を受け取り、それを別の人に売って代金を回収するか」。

クラクフの「オフィツィナ・リテラツカ」社と「オフィツィナ・マルギネス」社のいくつかの出版物は、ワルシャワでも入手可能である。どちらも小型のポケットサイズで丁寧な製本、模範的な編集作業であり、きわめて内容の良い本を出版している。だからこそ読者にも配布者にも非常に評判が良く、配布者はこの2社のものなら何冊でも引き受けていく。だが、こうしたものは通常、組織的配布網によってよりも、個人的なコネや幸運

DZIESIĄTY ROK NIEZALEŻNEGO RUCHU WYDAWNICZEGO



地下出版運動10周年記念地下切手(1986年)

や偶然によらなければ読者の手に入らない。おそらく今後改善可能ではあるだろうが……。最近ではヴウォジミェシュ・オドエフスキの小説「すべてを埋め覆いかくす」とアンナ・ポヤルスカの現代政治小説「アギトカ」が出版された。「アギトカ」の方はノヴァの企画とぶつかり、ノヴァ側が出版をとりやめる一幕もあった。他にヤン・ユゼフ・シチュェパンスキの「任期」も特筆すべき出版物である。もっと多くの部数がワルシャワに出回ればどんなに良いことか! 私はソルジェニーツィンの「ガン病棟」(ハードカバー版)の宣伝用見本版も見ることがある。ただ残念なことにこの2社は出版物に価格を印刷したり、価格シールを貼ったりしてくれない。さらに、配布中に値上げすることもしばしばである。これは許されないことである。

出版物の競合も

同じテーマの本が2冊同時に出ると、販売が難しくなる。……しかし、まったく同じ本が2社から出ると、読者の方は選択の幅が広がり喜ぶこと

が多い。たとえば、アダム・ザガエフスキの詩集「ルヅフへの帰還」は、より編集が丁寧で魅力的なマルギネス版の方が、別の出版所のよりよく売れた。

ヤン・ノヴァクの「ワルシャワからの急使」も2社から出たが、そのうちのひとつ（ヴォルノシチ社、ポズナン）は残念なことに3巻に分けて出版された。第1巻は1986年秋、第2巻は1987年春、そして第3巻はまだ出ていない。ある配布者は「私のお金が『凍結され』てしまった」と不平をこぼした。彼の考えでは、分割されたものを売るのはリスクが大きすぎる、第1巻の買い手はなんとか見つかったとしても、第3巻だけを買う人を見つけるのは極めて難しい、という。まさにこのケースにあたるのがCDNから出版されたヘルとニェクリチの分割本である。同じ本がクロンクとヴェルスからは1巻本として出され、ベストセラーになった。CDNはしばらく間をおいた後、現在は新たな活力を取り戻したようで、新しい出版物を何点か出している。かくして、第1巻から2年を経てようやくグスタフ・ヘリング＝グルジンスキの「夜に書かれた日記」の第2巻がCDNから出版された。幸いなことに、読者はこれを第1巻とは別の続編と受けとめている。

時として配布者の在庫棚に古い出版物が隠れているのがみつかると、このようにして私はミウオシュの「親愛なるヨーロッパ」（リテラ社、ポズナン）、オーウェルの「1984年」（オフィツィナ・リベラウフ社、ポズナン）、ヴォスレンスキーの「ノメンクラトゥラ」（ヴロツワフ大学独立学生連盟）にめぐり会った。

地下出版で何よりも驚くのはそのバラエティーの多様さであり、ほとんど何でもそろっていると行ってよい。デヴィッド・ポウノルの戯曲「マスター・コース」（ノヴァ）、ヴィエスワフ・サニエフスキの映画脚本「監督」、ステファン・プラトコフスキの戯曲集「3つの劇」（リトム）、ヤロスワフ・マレク・リムキエヴィチのミツキエヴィチ論、ドイツ社会学の古典たるマックス・ウェーバーの「職業としての政治」、リベラル思想ではギイ・ソルマンの「ミニマム・ステート」、タデウシュ・コンヴィツキとのインタビュー、ボル

シェビキ戦争の物語（エウゲニウシユ・マラチエフスキ「丘の上の馬」、ポコレーニエ社）、ニューヨーク・タイムズ特派員ヘドリック・スミスがソビエト市民生活を描いた「ロシア人」、ソ連強制収容所に関するアメリカ議会公聴会の記録、エルネスト・プリルの詩集、カトリック系週刊紙『テイゴドニク・ポフシェフヌイ』の定期寄稿者キシエルのエッセー集、レシエク・コワコフスキのエッセー集、それに西側のベストセラーズバイ小説「赤の広場」。クラクフのヤギェウォ大学でのサハロフに関する講座（1981年）の資料、タデウシユ・ノヴァコフスキによるローマ法王の旅行の報告「希望の翼に乗って」（ポコレーニエ）、そして「20世紀で最も重要な作品のひとつ」の1936年以來初のポーランド語版——つまり、ニコライ・ベルジャーエフの「新しい中世」（グウォシイ社、ポズナン）。1922年にソ連を追放された哲学者ベルジャーエフの作品でポーランドで地下出版されているのは、これともうひとつ「ロシア思想」（インブルス社）だけである。……

全体として、約40の出版所から最近だけで100を越す出版物が送り出されているが、まだまだ需要に供給が追いつかない状態である。入手不可能な本も多い。ここにあげた出版物は、この5月と6月にワルシャワの6人の配布者が扱ったもののほんの一部である。いくつかは今でも手に入れることができるが、その他はもうほとんど品切れである。

〔訳：高橋 初子〕



ポーランド日誌

1987年10月31日～11月30日

10月31日 ワレサ委員長が「連帯」全国執行委員会の結成に関して喚問される。政府の経済改革案についてサドフスキ副首相から説明を受けたOPZZ〔官製労組全国評議会〕のマルチニユク副議長は「すでにこの数年間犠牲を引き受けてきた。これ以上の犠牲には同意できない」と語る。国会の自主管理委員会のカニア委員長（元党第一書記）が、工場の自主管理評議会に「連帯」が浸透していると警告。

11月1日 官許紙「ポリティカ」によれば、青年問題研究所の調査の結果、ポーランドの青年の4人に1人が海外移住を考え、残りも2～6年、海外に渡りたいと思っているという。

11月2日 デンマークのイェンセン外相が公式訪問のためワルシャワ着。

11月3日 ラコフスキ国会副議長、官製ジャーナリスト協会との会談で、次の民主化措置として国会議員の選挙方法の改革や、党の役割の再検討、結社に関する法令の改正、パスポート規制の一層の緩和などが予定されているという。ウルバン政府スポークスマン、パリ・クラブがポーランドの債務支払いの延期に合意したことを確認、これにより西側債権国との関係改善の基礎ができたと言語。

11月5日 この日伝えられたところによれば、グダンスクで16名の知識人が「政治クラブ」を設立し、当局に正式登録を申請したという。

11月6日 ワレサ委員長とボグダン・リスが「連帯」全国執行委員会の設立に関連して事情聴取を受ける。この日伝えられたところによれば、A・スウォヴィクを含むウッチ「連帯」指導部が、全国委員会にはからずに新しい執行機関を設立したとしてワレサ委員長を批判したという。

11月7日 ワレサ委員長の呼びかけにより各界代表者45名がワルシャワで会合、政府の政治・経済改革案に対する対応を協議。東側ブロック全体が現在危機的的局面を迎えており、その政治的指導部自身、従来の権力行使の方法の危機を自覚している、この状況の下で反対派は変化をいかに促進するかを考えねばならない、最低限必要なのは、法の支配の保証、人権の尊重、労働組合の複数制である——という点で参加者は一致し

た。ワレサ委員長は、変化の過程が全東欧に及んでおり、これはきわめて重要、と語る。ヴロツワフで街頭パフォーマンスでロシア革命70周年記念式典のパロディを演じた「オレンジの選択」グループ150名が拘留される。

11月8日 「連帯」地下新聞編集者で元政治囚の建築家、チェスワフ・ビエレツキが公式建築コンペで首席に選ばれる。

11月9日 ワルシャワ中心部マルシャワコフスカ通りの建物に「ポーランドはいまだ滅びず——独立を目ざす『連帯』あるからに」と書かれた巨大な横断幕が掲げられる。数千の群衆が見守る中で撤去作業が行われ、この間90分以上にわたり交通が途絶。横断幕には「反対派独立グループ」の署名。同時にまかれたパンフレットには「われわれは犠牲を引き受ける用意はあるが、この犠牲が無駄にならない保証が必要である。最良の保証は『連帯』の復活である」とあった。この日のPAP通信によれば、グダンスク県庁当局が「独立自治労働組合『連帯』全国執行委員会」を名乗る組織の結成と活動を禁止する。ワレサ委員長、「われわれは当局に許可を求めるつもりはないから、この決定は守られないだろう」と語る。

11月10日 政府スポークスマンによれば、昨日ヴロツワフで、急進的政治グループ「闘う連帯」の指導者、コルネル・モラヴィエツキが逮捕されたという。モラヴィエツキは1981年12月の戒厳令施行後地下に潜行し、この間に「闘う連帯」を組織、そのポーランド独立のための直接的行動の訴えは多くの若者をひきつけている〔彼の主張については本誌1986年12月号所収のインタビュー、「ポーランドを思う」を参照〕。

11月11日 ポーランド独立〔1918年の〕69周年のこの日、ワルシャワの聖ヤン大聖堂でのミサのあと、数千が街頭デモを試みるが、警察により解散させられる。一部はヴィクトリア広場の無名戦士の墓に献花。クラクフ、グダンスク、カトヴィツェ、トルン等でも「連帯」デモンストレーション。

11月12日 ヤルゼルスキ将軍が米紙『ワシントン・ポスト』とのインタビューで、ワルシャワ条約機構がNATOの爆撃機の削減を交換条件に戦車の削減に応じる用意がある、と述べる。

11月13日 11月29日の国民投票で賛成が得られれば実施予定の来年度の値上げ計画が発表される。消費財の値上げは平均40%になるという。

11月14日 西側ジャーナリストを対象とした政府主催

セミナーで世論調査センターが発表したところによれば、きたるべき国民投票に参加すると答えた有権者は全体の42.4%にとどまるといふ。

11月15日 ワルシャワでポーランド社会党（PPS）再建集会に警察が踏み込み、数名が拘留される〔PPSは戦間期ポーランドの社会主義政党で、1948年に統一労働者党（共産党）に吸収された〕。

11月16日 「連帯」全国執行委員会が声明を発表、政府による食料・燃料補助金打ち切りを批判し、物価上昇に懸念を表明。ワルシャワで記者会見中のPPS指導者20余名と西側ジャーナリスト数名が拘留される。ヤルゼルスキ将軍、改革問題をめぐりグレンプ首座大司教と会談。政府当局、ILO脱退宣言の撤回を発表。

11月17日 11月25日開催予定の中央委総会に提出される政治改革案——「民主主義の拡大」と地方議会選挙の機会の「平等」をうたった——が公表される。この種の提案の事前公表ははじめて。

11月18日 再建PPSメンバー2人が工場前でパンフを配布中に拘留される。ブランシャールILO事務総長、ポーランドのILO脱退宣言の撤回を歓迎。

11月19日 ヤルゼルスキ将軍、公式訪問のためアネト到着。400余のポーランド人移住者が抗議デモ。

11月21日 再建PPSが議長にJ・J・リプスキ、副議長にW・クニツキ＝ゴールドフィンガーとJ・ピニオルを選出。36名の著名な学者が、学問の自由の政治的制限に抗議する公開書簡を発表。

11月22日 ワルシャワ郊外ガルヴォリンの町で国民投票の「先行演習」、有権者9,383名中5,811名が投票に参加、うち5,393名が賛成票を投じたという。

11月23日 O P Z〔官製労組全国評議会〕が国民投票参加の呼びかけを発する。経済改革は値上げと同一

視されているとして、政府案に批判的の見解も盛り込まれる。オーストラリアのハイデン外相がワルシャワ着。

11月24日 ウルバン政府スポークスマン、先週木曜日（11月19日）に旧「連帯」暫定調整委員会メンバーで現在同全国執行委員会メンバーのJ・A・グルヌイが「養育費不払い」で逮捕されたことを明らかにする。ヴロツワフで「闘う連帯」指導者K・モラヴィエツキの釈放を求めて2,000余がデモ、16名が拘留される。国民投票までの間、9度以上のアルコール類の販売が禁止になる。

11月25日 統一労働者党中央委総会が開催され、経済・政治改革問題が討議される。

11月27日 ヴロツワフで再建PPS、自由と平和、その他自立的グループが雨の中をK・モラヴィエツキの釈放を求めてデモ、150余が拘留される。

11月28日 ヴロツワフで開催された再建PPS中央委員会に警察が踏み込み、指導者9名が拘留される。

11月29日 経済改革と政治的民主化について信を問う国民投票が実施される。投票者は、賛成なら「反対」の項に、反対なら「賛成」の項に×印をつける。有権者総数の51%以上の賛成によって信認が成立する。ワルシャワ、クラクフ、グダンスク、ノヴェファタなどで抗議デモ。

11月30日 ウルバン政府スポークスマンによれば、昨日の国民投票は投票率が68%で政府予測を約10%下回った。賛成票は経済改革を問う第1テーマが66%、政治的民主化を問う第2テーマが70%で、有権者総数に対する賛成率はそれぞれ44%、46%と、いずれも法定の51%に達しなかった。

〔編訳：水谷 誠〕

編集後記

☆経済改革へ「支持」確保——さる11月29日に行われたポーランドの国民投票の結果を伝える朝日新聞の第1報です（12月1日付朝刊）。同じ日の読売新聞朝刊はまったく逆に政府提案を否決と報じました。毎日新聞の第1報は同日付夕刊となり、経済改革を事実上否決でした。朝日は、開票結果を見ないまま、68%という投票率に基いた速断だったのです。さすが同日付夕刊は賛成、過半数に達せずと軌道修正し

たものの、朝日第1報を誤報として訂正するにはいたりませんでした。

☆「有権者の過半数」という基準を設けたのは政府当局自身でした。よほどの自信があったのでしょうか、それにしても意外な結果でした。「連帯」関係の反応は未着。次号で紹介します。

☆新年号の巻頭をカンパ要請が飾る（？）という醜態！ 窮状をご明察のうえ、よろしくお願ひします。次号は2月末刊。よいお年をお迎え下さい。

1987年12月15日 (み)

ポーランド月報バックナンバー目次

1987年10月号(通巻67号) 24頁 400円

ゴルバチョフ改革とポーランド
偉大なる対抗改革者 アダム・ミフニク……3
ゴルバチョフ改革に関する3つの見解……8
カロル・グロトコフスキ
ゴルバチョフ、政府、「連帯」、教会……11
『週刊マゾフシエ』座談会
歴史の「空白」を埋める……10
ポーランド=チェコスロヴァキア連帯友の会……14
両国反対派の共同声明
ポーランドにおける医薬品の供給状況……16
ロマン・ビェドノタ
米国議会の100万ドルは医療体制の改善に……17
レフ・ワレサ
ポーランド日誌 1987年7月1日～8月31日……22

「連帯」関係者の討論から
ポーランドから見たゴルバチョフ……8
「クルトウラ」誌アンケート
L・コワコフスキ/A・スモラル/K・ボミヤン
「連帯」全国委員会を早期に開催せよ……16
「連帯」全国委員会メンバー22名の公開状
ポーランド社会の意識状況 ロマン・グラチク……18
ポーランド日誌 1987年9月1日～29日……22

1987年11月号(通巻68号) 24頁 400円

ゴルバチョフ改革と東ヨーロッパ
ゴルバチョフ改革と東ヨーロッパ……3
ポーランド=チェコスロヴァキア反対派
共同声明
「ベレストロイカ」は利用できるか……5

1987年12月号(通巻69号) 24頁 400円

国民投票の課題は何か? レフ・ワレサ……3
国民投票はボイコットを……4
「連帯」全国執行委員会の呼びかけ
政府経済改革案への意見……6
戦いすんだ戦場……11
インタビュー:ヤツェク・クアロン
「連帯」にひとり残された「連帯」……14
「連帯」暫定評議会の議論から
「連帯」組織の正式登録を……21
「連帯」暫定調整委員会/暫定評議会
ポーランド日誌 1987年9月30日～10月31日……22

Batalion MIOTLA



Poznań 50 21

Batalion MIOTLA



Poznań 50 21

Batalion MIOTLA



Poznań 50 21

Batalion MIOTLA



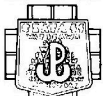
Poznań 50 21

Batalion MIOTLA



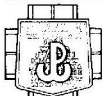
Poznań 50 21

Batalion CZATA 49



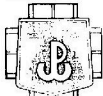
Poznań 50 21

Batalion CZATA 49



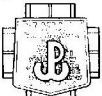
Poznań 50 21

Batalion CZATA 49



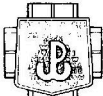
Poznań 50 21

Batalion CZATA 49



Poznań 50 21

Batalion CZATA 49



Poznań 50 21

発行所・ポーランド資料センター

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg, 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

事務所は月・水・金 14:00~17:00

定価500円・年間定期購読料4600円(送料共)